

# I 領域「健康」の考え方

## 1 心身の健康に関する領域「健康」とは

この領域は「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことをねらいとしている。

生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に愛情に支えられた安全な環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することによって培われていくものである。健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つことを目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである。

健康な心は、自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てるなど、身体諸機能の調和的な発達を促す上でも重要なことである。特に幼児期においては、自分の体を十分に動かし、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて、進んで体を動かそうとする意欲等を育てることが大切である。

同時に自分の体を大切にしたり、身の回りを清潔で安全なものにしたりするなどの生活に必要な習慣や態度を、幼稚園生活の自然な流れの中で身に付け、次第に生活に必要な行動について、見通しをもって自立的に行動していくようにすることも重要なことである。

## 2 「健康」の領域で育てたい幼児の姿

幼児は、幼稚園生活において、安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく。5歳児の後半には、こうした積み重ねを通して、充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり、諸感覚を働かせ体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に働かせ、遊びや生活に見通しをもって自立的に行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出す姿が見られるようになる。

教師は、幼稚園生活の流れ、幼稚園内の様々な場所や遊具、教師や友達等、それぞれが幼児にどのように受け止められ、いかなる意味をもつのかについて捉え、幼児の主体的な活動を促す環境をつくり出すことが必要である。その上で、幼児が自ら体を動かし多様な動きを楽しむことや、よりよい生活のために必要な行動を幼児の必要感に基づいて身に付けていくことなど、発達に即して幼児の必要な体験が得られるよう工夫していくことが求められる。その際、健康で安全な生活のために必要なことを、学級で話題にして一緒に考えてやってみたり、自分たちでできたことを十分に認めたりするなど、自分たちで生活をつくり出している実感をもつことができるようにすることが大切である。また、交通安全を含む安全に関する指導については、日常的な指導を積み重ねることによって、自ら行動できるようにしていくことが重要である。

## 3 自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うために

### (1) しなやかな心と体の発達を促し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにする

幼児は、自分の存在を教師や友達に肯定的に受け入れられていると感じられるとき、生き生きと行動し、自分の本心や自分らしさを素直に表現するようになり、その結果、意欲的な態度や活発な体の動きを身に付けていく。そして、様々な環境に取り組んで活動を展開することを通して、様々な場面に対応できるしなやかな心の働きや体の動きを体得していく。

また、教師や友達との温かい触れ合いの中で、遊びを通じて体を思い切り動かす気持ちよさを味わうことを繰り返し体験し、次第にいろいろな場面で進んで体を動かそうとする意欲が育つように、教師は幼児が自然に体を動かしたくなるような環境の構成を工夫することが大切である。

## (2) 体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにする

幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って伸び伸びと活動できるように教師が配慮することにより、幼児は十分に体を動かす楽しさを実感する。

幼児が自分から十分に体を動かす心地よさを味わえるようにし、活動欲求を満たす体験を重ねる中で、適度な休息をとる、汗をかいたら着替えるなど、自分の体を大切にしようとする気持ちをもつような働き掛けが必要である。

また、幼児期に必要な基本的な動きが身に付くよう、教師は、遊びの中で幼児が多様な動きが経験できるよう工夫することが大切である。

## (3) 興味や関心が戸外にも向くようにする

自然に触れ、その自然を感じながら伸び伸びと体を動かすことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外に向くように、次の点から幼児の動線に配慮することが大切である。

- ・ 幼児の遊びのイメージ、興味や関心の広がりに応じて行動範囲が広がることを考慮すること
- ・ 園庭全体の空間や遊具の配置を幼児の自然な活動の流れに合わせること
- ・ 年齢の異なる多くの幼児が安定して自分たちの活動を展開できるように、園庭の使い方や遊具の配置の仕方を必要に応じて見直すこと

## (4) 食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにする

教師や友達と食べるとより一層楽しくなることを感じるためには、和やかな雰囲気づくりをすることが大切である。

また、野菜等を育てる、食べ物への興味関心を高める活動として教師と共に簡単な料理をする、農家等の地域の人と交流するなど、幼児の身近に食べ物があることにより、幼児は食べ物に親しみを感じ、興味や関心をもち、食べてみたい物が増え、進んで食べようとする気持ちが育つ。

なお、食物アレルギー等をもつ幼児に対しては、家庭との連携を図り、適切な対応を行うなど、十分な配慮をする必要がある。

## (5) 生活に必要な習慣を身に付け、見通しをもって行動できるようにする

生活に必要な行動が本当に身に付くためには、自立心とともに、自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性が育てられなければならない。それが、次第に見通しをもって、1日の生活の流れの中で行動できるようになることにつながっていく。

教師は、幼児が自分でやろうとする行動を温かく見守り、励ましたり、手を添えたりしながら、自分でやり遂げたという満足感を味わわせるようにして、自立心を育てることが大切である。同時に、基本的な生活習慣を身に付けさせたり、自分たちの生活にとって必要な行動やきまりがあることに気付かせたりすることなどにより、幼児自身に生活に必要な習慣を身に付けることの大切さに気付かせ、自覚させるようにして、自律性を育てることが大切である。

## (6) 安全についての理解を深め、災害等の緊急時に適切な行動がとれるようにする

幼児の事故は情緒の安定と関係が深いので、教師や友達と温かいつながりをもち、安定した情緒の下で幼稚園生活が展開されていることが大切である。

交通安全の習慣を身に付けさせるために、日常の生活を通して家庭と連携を図りながら適切な指導を具体的な体験を通して繰り返し行うことが必要である。

さらに、災害時の行動の仕方や様々な犯罪から身を守る対処の仕方を身に付けさせるためには、幼児の発達の実情に応じて、基本的な対処の方法を確実に伝える必要がある。

特に、火事や地震等の自然災害を想定した避難訓練は、災害時には教師の下でその指示に従い、一人一人が落ち着いた行動がとれるように行うことが重要である。

《参考文献》 幼稚園教育要領解説 平成30年3月 文部科学省

## Ⅱ 日常の実践事例

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくりだす力を養う。

### 【ねらい】

(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。

(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。

(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

### 【内容】

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

## 1 ねらい(1)について

### (事例1) 3歳児「一緒に踊ると楽しいね」

— 教師と一緒に友達と遊ぶ中で、友達と心が通じ安定していった事例 —

A児は、入園当初、友達の遊ぶ姿をそばで見ている。教師はA児を誘い、友達と一緒に遊ぶ機会をもつようにしてきた。また、友達にA児を誘ってもらって、友達と遊ぶ機会を増やすようにもした。友達と遊び出すとA児は嬉しくなって大きな声で話すようになった。教師がA児のそばで友達の名前を呼び、A児に友達の名前が分かるようにしていったところ、少しずつ友達の名前を覚えて言えるようになった。

しばらくして、自分から友達の遊びの輪に入っていけるようになると、周りの友達の様子を見て真似しようとするようになった。ある日、子供たちが曲に合わせて踊っていると、A児は友達の近くに行き、リズムに合わせて踊り出した。曲が終わるとA児は、「あー楽しかったね」「もっと踊りたいね」と友達に伝えていた。

A児は、初めての集団生活で、同年齢の友達と遊んだ経験も少なく、入園当初は不安で、教師のそばにすることが多かった。教師は、A児に友達と遊ぶ楽しさを味わってほしいと思い、友達と遊ぶ機会やきっかけをつくるようにした。そして、友達と遊ぶ楽しさを感じ始めた時期を見逃さず、A児が好きな踊りを友達と一緒に楽しめるようにしたことで、友達と触れ合うことにさらに喜びを感じることができた。こうして、教師や友達と心がつながり、楽しく園生活を送ることができるようになったと思われる。

### (事例2) 3歳児「着替え一人でできたよ」

— 自分でできたことを認められ、自信をもって様々なことに取り組むようになった事例 —

A児は、初めてのことやできるかどうか心配なことには、泣いて取り組めないことが度々あった。そのため、教師はA児の横に付いて一緒に取り組んだり、A児が落ち着いてから個別に取り組ませたりしてきた。

ある日の登園後、制服から体操服に着替える際、A児は一人で着替えを済ませた。教師が「すごいね。上手に着替えができるね。家でも練習したんでしょ。がんばったね」と声をかけると、A児は「そう、家でも一人でしてるよ」と嬉しそうに話した。

その後、初めてのことも泣かずに取り組もうとするようになっていった。

進級後、新しいクラスに緊張していたA児は、自分のそばに常に教師がいないと泣き出すことが多かった。着替えに関しては、ボタンを留めることやスカートを履くことが難しく教師の手伝いが必要な子供がいる中、A児は一人でも短時間で着替えることができていた。そこで、保護者に園でのA児の着替えが上手な様子を伝えると、家で練習してできるようになったことが分かった。そのため、A児が上手に着替えることができたときに、家でもがんばっていることを認める言葉掛けができた。A児は教師に褒められたことが嬉しく、自信につながった様子であった。

着替えを自分一人でできたことへの自信から、教師の援助がなくても様々なことをやってみようとする意欲へと結び付いたと考える。

### (事例3) 4歳児「縄跳び、跳べるようになったよ」

— 教師の声掛けをもとに自分で考え、健康な生活に必要な習慣を身に付けた事例 —

数名の女児が5歳児の運動遊びの様子を見て、縄跳びを始めた。A児は縄を回そうとするがうまくできず、足や頭に引っかかり諦めようとしていた。先に跳べるようになったB児が「回して、ぴよんだよ」とA児に跳び方のコツを伝え、隣で実際に跳んで見せた。その後、A児は毎日何度も挑戦し、連続で10回跳べるようになった。友達や教師に褒められ、嬉しそうに縄跳びを続けた。

A児は、何度も縄跳びに挑戦したため汗をかいた。A児は「着替えよう」と一緒に縄跳びをしていたB児に声をかけ、教師にも「汗をかいたから着替えるね」と伝えた。教師が「水分補給もしてね」と言うとA児は「分かった」と答え、着替えを済ませた後、自分の椅子に座り、お茶を飲んだ。A児は「たくさん汗をかいたからおいしいね」とB児に話し、B児も「水分補給しないと体がカラカラになって倒れるもんね」と言って二人で休息をとり、明日も縄跳びをしようとして約束し合った。

4歳児は、5歳児の運動遊びの様子を見て、憧れの気持ちをもち、縄跳びに挑戦し始めた。そこで教師は、縄跳びができるよう広い場所を確保し、跳んだ回数を数えたり応援したりしながら、子供が体を動かして遊ぶことの楽しさや跳べたことへの達成感が味わえるよう努めた。

また、教師は、普段から子供たちに水分補給を促してきた。特に夏場は気温が高く、汗をたくさんかくため、脱水症状にならないよう水分補給の大切さを伝えてきた。さらに、汗をかいたときは着替えをすることも繰り返し促してきた。子供たちに何度も繰り返し伝えてきたことで、生活に必要な習慣が身に付いてきたと思われる。A児も、遊びの後に自分で汗をかいているかどうかを判断し、着替えたり、水分補給をしたりすることができた。

A児は、自分のしたい遊びを見つけて伸び伸びと取り組み、友達と一緒に楽しみながら遊びの充実感を味わうとともに、自分の体のことも意識して生活するようになった。

#### (事例4) 5歳児「カレーライスをつくったよ」

— 自分たちで栽培したり調理したりしたことで、食べ物への興味や関心を高めた事例 —

4月にじゃがいもの種芋を植え、泥よせや草むしり等の世話をして大切に育てた。じゃがいもの生長を観察し、収穫を心待ちにしていた。「じゃがいもの花は紫色だね」「星みたいな形してるよ」と発見したことを伝え合い、見えない土の中でじゃがいもがどのように育っているかを楽しみにしていた。

7月に入り、収穫の日を迎えた。ところが、その日は、朝から雨模様だったので、教師は延期しようと考えた。しかし、子供たちは空の様子をずっと気にして、少しでも晴れ間があると、「先生、晴れてる。じゃがいも掘ろう」と収穫したくて仕方がない様子を見せた。そこで、その思いを大切に、収穫することにした。

収穫時には、「大きいじゃがいもになってる」「小さい赤ちゃんいももある」と喜んでいた。虫に食べられているじゃがいもを見てA児は「虫さんも食べる、おいしいじゃがいもなんだね」と嬉しそうに友達と話していた。

それから数日後、収穫したじゃがいもを使ってカレーライスをつくる「おいもパーティー」を行った。子供たちは「包丁を持たない手は、猫の手の形だよ」という教師の話や、真剣に聞いていた。A児は、調理を始める前から「早く食べたいね」と友達と話していた。じゃがいもの皮を剥いたり、包丁で切ったりして頑張ったカレーライスを食べたA児は「お母さんのカレーライスよりもおいしい」とおかわりをした。普段、給食をあまり食べなかったB児もおかわりをした。どの子供も、友達とつくったカレーライスをもりもり食べた。

じゃがいもが土の中で育つことや紫色の花が咲くこと等、実際に育てたからこそ興味をもったり知ったりしたことが多くあった。子どもたちの様子を見てみると、絵本や図鑑で見るだけでなく、実際に育てることが大切であるとあらためて感じた。

また、じゃがいもの皮を剥いたり、包丁で切ったりする活動は普段の保育ではなかなか経験できない。そのため、安全に配慮しながら、子供たちが伸び伸びと活動することができるよう援助することが必要である。自分たちで育てて収穫したじゃがいもを使ってカレーライスをつくる「おいもパーティー」を行ったことで、食べ物への興味や関心をもち、みんなと食べることを楽しむ姿につながったと考える。

## 2 ねらい(2)について

### (事例1) 3歳児「あ、トンボだ」

— 好きな虫の動きと運動遊びを関連付けたことで、思い切り体を動かした事例 —

A児は、外遊びの時間になると、「先生、バッタいるかな。今日も一緒に捕まえよう」と、教師を誘い、教師と一緒に園庭の草むらへ一直線に走り出した。草をかき分けながらバッタを探していると、そこに一匹のトンボが飛んできた。A児の「あ、トンボだ」との声に、教師も「本当だ」とそのトンボを見た。A児は、「あっちにもいる」と他のトンボも発見した。教師が「あのトンボとこのトンボ、追いかけてごっこしているみたいだね」と、トンボの様子をA児の好きな追いかけてごっこに例えると、A児は「本当だ。僕も追いかけるよ。トンボ、待ってえ」と走り出した。それを見ていた他の子供たちも、「キャー」「待ってえ」「速いね」と次々にトンボを追いかけて出した。トンボが園外に飛んでいくと、子供たちはがっかりした様子だったが、「あっちにもこっちにもトンボがいるよ」との教師の声掛けに、他にもトンボがいることに気が付き、再び走って追いかけて始めた。

虫に興味をもち始めたA児に寄り添い、教師と一緒に活動したことで、A児は虫を探す楽しさを十分に味わえたのであろう。その中で、A児がトンボに興味を示したときに、トンボの動きをA児の好きな遊びである「追いかけてごっこ」にたとえた。それを聞いたA児は、自分もトンボを追いかけていたいと思い走り出した。周りにいた子供たちも、仲のよい友達が楽しそうに走っている姿を見たことで、自然に自分もやりたいという気持ちが芽生え、一緒にトンボを追いかけて走り出したのであろう。

A児たちは、好きな遊びのイメージをふくらませたことで、虫採りから、自然と動きのある遊びに発展させていくことができた。教師は、子供たちが今どのようなことに興味をもっているかを知り、一緒に遊びながら、タイミングよく経験させたい遊びに子供が気付けるような声掛けをすることが大切である。

### (事例2) 3歳児「ぼくたちもできたよ」

— 新たな遊びに興味をもち、体を十分に動かして遊んだ事例 —

子供たちはボールを投げたり転がしたりして、思い思いに遊んでいた。「先生、転がしドッジボールをしたい」という5歳児の言葉から転がしドッジボールが始まった。みんなで一緒にゲームを始めたが、経験のない3歳児には難しいようだったので、5歳児と4歳児が遊ぶ様子を見ることにした。5歳児や4歳児の姿を見ているうちに、3歳児も少しやり方が分かってきたようで、「やりたい」と意欲を示した。

しかし、実際にやってみると、3歳児はボールが近くに来ても逃げるできない。教師は、「ボールに当たらないように逃げるよ」と声をかけたり一緒に逃げたりした。すると、徐々にボールの動きを見ながら片足を上げたり、左右に逃げたりするようになった。「逃げるのがうまくなったね」と教師が声をかけると、子供たちは満足そうな表情になった。何度も繰り返すうちに、ボールの転がる方向を集中して見たり、ボールの上をジャンプしたりするなど、ボールから逃げる様々な動きができるようになり、遊びを続けた。

5歳児や4歳児の姿を見たことで3歳児は刺激を受け、新しい遊びを試してみたいと思うようになった。遊んでいる様子を見たり一緒に遊んだりしていくうちに遊び方が分かり、逃げ方を工夫して共にゲームを楽しむことができたと考える。初めて転がしドッジボールをして遊んだ3歳児であったが、教師が声をかけたり一緒に遊んだりしたことで、安心して遊ぶことができたのであろう。

### (事例3) 3歳児(複式学級)「サーキットで遊ぼう」

— 体を動かすいろいろな遊びに触れ、友達や年上児と遊ぶ楽しさを味わった事例 —

教師は、4歳児と相談しながら鉄棒や巧技台、トンネル、ハードルを組み合わせて3歳児も一緒に遊べるサーキットを設定した。そして、コーナーごとに、ルールや遊び方を3歳児に知らせた。4歳児が「高くジャンプできたら、タン布林叩けるよ。見ていてね」と、次々に巧技台のジャンプ台からジャンプして、教師が持っているタン布林を叩いて見せた。それを見たA児は、ジャンプ台に登り、タン布林を持っている教師に「高くして」と頼んだ。ジャンプしてタン布林を叩くと「やったあ」と喜び、教師は「やったね」と声をかけた。すると、B児も「Aちゃんよりもっと高くして」と頼んだので、教師は、更にタン布林を高く上げた。B児もタン布林を叩くことができ「やったあ。できた」と喜んだ。教師が「高くジャンプができたね」と声をかけると、その次に待っていた4歳児C児も「Bちゃんすごいね」と声をかけた。B児は、嬉しそうに次のトンネルへ向かった。

トンネルの途中で、3歳児数人が止まっていると、C児が「止まっていると、次の人が行けなくなるから、進んでね」と声をかけた。3歳児は、四つん這いで慌てて進みトンネルから出ると、また入口に戻ってトンネルに入っていった。その姿を見たC児は、3歳児を追いかけて、トンネルに入っていった。すると3歳児はC児に追いかけられることを喜び、繰り返しトンネルに入り、C児も繰り返し追いかけて遊んだ。

3歳児が鉄棒にぶら下がって足を上げたり、揺れたりしていると、4歳児D児が「こんなことできるよ」と言って「ブタの丸焼き」「足抜き回り」「腰抜き回り」をして見せた。E児は「やってみたい」と鉄棒につかまり、足を上げようとしたが、両足で鉄棒を挟むことができなかった。そこでD児が「もう少し足を高く上げた方がいいよ」と声をかけると、E児はもう一度挑戦した。D児は「頑張れ」と応援し、教師は足で鉄棒を挟むことができるように体を支えた。するとE児は「ブタの丸焼き」ができるようになり、E児とD児と教師は「やったあ」と一緒に喜んだ。

遊びの振り返りでは、それぞれ楽しかったことや嬉しかったことを話した。

3・4歳児の複式学級で普段一緒に生活しているが、個々の遊びが多い。そこで、互いに思いやったり、刺激を受けたりして遊ぶことができるよう、教師は4歳児と相談して3歳児と一緒に遊ぶ場を設定した。すると、4歳児は、教師と一緒にルールや決まりを考え、年下児に教えたり、モデルとなって遊んだりして関わる姿が見られ、自然な交流の場となった。

3歳児は、各コーナーでの遊び方が分かり、年上児や友達のしていることを真似てやってみようとし、できた喜びを感じることができた。この喜びがあったからこそ、自ら生き生きと活動し、友達や年上児と体を動かす楽しさを共有することができたと思われる。

教師が、子供たちが関わる遊びの場を構成したり、遊びの中でそれぞれの子供の興味や楽しみ方を捉えて適時に声をかけたりすることで、体を動かすいろいろな遊びに触れることができた。



#### (事例4) 4歳児「年長組さんみたいに」

— 5歳児の姿への憧れから、主体的な活動に結び付いた事例 —

運動会に向け、園庭では5歳児のリレーが繰り広げられていた。5歳児が勝敗をかけ、作戦を話し合ったり友達を応援したりする姿や、バトンを持って勇ましく走る姿を、4歳児は日々憧れのまなざしで見ている。トラックの白線上をA児とB児が走っていると、5歳児が「線の上じゃなくて、外側を走るんだよ」と一緒に走って教えてくれた。その様子を見ていた他の子供たちも参加すると、5歳児数名がスタート位置や走り方等を4歳児に教えながら、リレーごっこが始まった。

始めはバトンパスをするより、自分でバトンを持って走ることが楽しかった4歳児だったが、翌週になると、5歳児のリレーの様子を思い出しながら、A児、B児が中心となり「バトンは一つだったね」「ここで次に走る人に渡そうね」と友達とルールを伝え合い、走る順番を決める姿が見られた。その後もバトンを受け取ると力いっぱい走ったり、友達が走るのを応援したりしながらリレーごっこを楽しんだ。

「自分たちもやってみたい」と5歳児への憧れの気持ちから始まった活動であった。そのような意欲を喚起するためには、子供の興味を探り、したい遊びをいつでも始められるような環境を設定することや、日頃からの異年齢交流が必要である。また、教師が走り方やリレーのルールを教えるのではなく、子供の発達や育ちを丁寧に捉え、教師間で共通理解して見守ったことが、子供の主体的な活動につながったと考えられる。

#### (事例5) 4歳児「蔓って楽しい」

— 自然物を使った環境の工夫により、戸外での活動への意欲を高めた事例 —

芋ほりでは友達と一緒に長い蔓を引っ張り、たくさんのサツマイモの収穫を楽しんだ。翌日、園庭に置いてある大量の蔓を見つけた子供たちは、教師がツリーハウスに設置した蔓のブランコに乗ったり、蔓を綱引きのように引っ張り合ったりして遊んでいた。女兒2人は蔓をなわに見立てて短なわ跳びに挑戦していたが、本物の短なわのように上手く跳べなかったため、長なわ跳びをすることを思いついた。教師に蔓を回してもらい「ゆうびんやさん」を始めると、次々と友達が参加し、大勢で蔓の長なわ跳びを楽しんだ。また、蔓を輪の形に巻き、バトンに見立ててリレーごっこを楽しむ子供もいた。日頃、運動遊びにあまり関心がない子供も、蔓に触れながら体を動かす姿が園庭いっぱい広がっていた。

芋ほりを経験した子供たちにとって親しみのある蔓を準備しておいたことで、子供たちの遊びのイメージが広がり、いつも遊んでいる園庭や活動が、更に心が動く魅力的なものに感じられたと考えられる。また、戸外で伸び伸びと自然を感じながら友達や教師と触れ合うと、幼児の心が安定し、活動への意欲が高まると考える。

## (事例6) 5歳児「たくさんジャンプして遊びたいね」

— 目的の実現に向けて、工夫して遊びをつくりだした事例 —

子供たちは、遠足で動物園へ行った経験から、巧技台やゲームボックス、トランポリン等を組み合わせ、いろいろな動物になりきって運動ができるサーキット遊び「どうぶつランド」をつくった。

A児とB児は、レッサーパンダになって、巧技台の滑り台を滑り、風船をりんごに見立てジャンプしてタッチするコーナーをつくっていた。

A児は「たくさんジャンプして遊びたいね。風船、どのくらいの高さにしようかな」と迷っていた。B児が「まず風船を付けようよ」と提案すると、A児も「そうしよう」と賛成し、二人は風船を付けた。教師が「試してみたらいいね」と声をかけると、二人はジャンプしてタッチできる高さかどうか実際に跳んでみた。B児が「ジャンプしなくてもタッチできてしまう」と言うと、A児は「風船をもっと高くしないとだめだよ。ひもが長いね」と、ひもを短くして風船を高く吊すことを提案した。二人は、吊す高さを変えたり試したりすることを繰り返し、風船の位置は徐々に高くなった。

A児が「やってみよう」と言って、風船の下で止まった状態からジャンプした。何度かジャンプしたがタッチできない。それを見ていた教師は、「Aちゃん、風船をよく見て思い切りジャンプ」と声をかけた。A児は、風船をよく見て前より高くジャンプし、タッチすることができた。A児は「やった、タッチできた」と喜んだ。教師が「Aちゃん、すごい。レッサーパンダみたいにジャンプできたね」と声をかけると、ますます嬉しそうな顔をした。B児は、「走ってジャンプしてみる」と言って、助走をつけてタッチしていた。

それぞれの子供が「どうぶつランド」で工夫しながら繰り返し遊びを楽しむ姿が見られた。

「たくさんジャンプして遊びたい」という目的をもったことで、A児とB児は、そのためにどうしたらよいか互いの考えたことを伝え合い、試しながら、遊びを進めていく楽しさを味わった。二人は、ちょうどよい手ごたえの風船の高さにするために、何度もジャンプして体を動かすことになった。教師が、試すことを提案したことで、思いを伝え合ったり試したりしながら、遊びの場をつくりだすことができた。また、なかなか風船にタッチできないA児に対し、アドバイスをし、タッチできた喜びに共感したことも、意欲的に体を動かすことにつながったと思われる。

教師は、子供の目的に沿いながら、友達と遊びを進めていく楽しさや体を動かして遊ぶ楽しさが味わえるように、子供と一緒に環境を整えたり、必要な声掛けをタイミングよくしたりすることが大切である。

### 3 ねらい(3)について

#### (事例1) 3歳児「ガタン、ゴトン…」

— 分かりやすく取り組めるように工夫したことで、生活に必要な活動を自分でするようになった事例 —

新型コロナウイルス感染症拡大防止のための登園自粛期間が明けて1か月が過ぎた頃、教師は子供たちの生活の乱れを整え、園生活に慣れることを課題としていた。

そこで、ボタン留めが苦手なA児には、ボタンを電車に、ボタンホールをトンネルに見立て声をかけながら教師と一緒にボタン留めを行った。そして、何日も練習を続けた。

ある日、A児が「ガタン、ゴトン」と言いながら一人でボタン留めに挑戦していた。「ガタン、ゴトン…ガタン、ゴトン…ガタン、ゴトン…」と声が聞こえなくなったと思ったその瞬間、顔をあげて嬉しそうに教師の方を見つめ、「できた」と教師に伝えた。

A児は、何でも自分でやろうという気持ちが大きくなってきていた。前日までは教師がそばで声をかけていないとできなかったボタン留めにも、この日は自分から取りかかったので、黙って見ていることにした。A児が、「教師がそばにいても一人でやってみよう」「できたことを教師に報告し喜びを共有したい」という思いをもったことが上達につながったと考える。基本的な生活習慣の獲得には、日頃の教師との信頼関係も大きく関わると言える。

衣服の着脱の手順を分かりやすく楽しめるように工夫して示し、意欲的に取り組めるようにしたことで、A児は何度も練習に取り組み、上達した。3歳児にとって入園当初は生活リズムを整え、園生活に慣れることが大切な時期である。身の回りの生活に必要なことが身に付くと、自信をもって園生活を送ることができるようになるので、このような援助を丁寧に行うことが大切であると考えられる。

#### (事例2) 3歳児「こんなに汚れていたね」

— 自分たちで生活の場を整え、きれいになったことを実感した事例 —

3・4・5歳児でお化け屋敷を作ろうと、大きな段ボールを絵具で色塗りをした。

給食後、年長5歳児が率先して掃除を行い、それを見ていた年少3歳児も真似て雑巾で床を拭き始めた。汚れを拭きとった雑巾を見つめ「こんなに汚れている」とつぶやいた。そして、自分たちが拭いたところを振り返って見て、「こんなにきれいになってる」とうれしそうに伝え合っていた。

5歳児の行動に憧れ、拭き掃除を始めた3歳児であった。3歳児にとって拭き掃除は初めての経験であり、実際に拭き終えた布の汚れと、汚れがとれた床を目にすることで、汚れがとれてきれいになったことを実感したようだ。

今回、自分たちで掃除や片付けを行ったことで、汚れがとれるときれいになる気持ちよさを感じ、掃除や片付けの必要性を知るきっかけとなったと考えられる。

### (事例3) 4歳児「危なくなかったかな」

— 危険な遊び方に気づき、安全に気を付けて行動するようになった事例 —

朝から雨が降っていたので、「先生、今日はサーキットしたい」と子供たちから声があがった。しかし、5歳児が廊下に置いてある平均台やハードル、扁平型ゴムリング、跳び箱等サーキット遊びで使いたい用具を先に使って遊んでいたため、4歳児の子供たちは、サーキット遊びができない状況となった。

5歳児の様子を見た子供たちから「楽しそう」「一緒に遊びたい」という声が聞かれたので、5歳児のクラスに行き、みんなで「入れて」と言ってみた。それをきっかけに、2部屋と廊下を使って遊ぶことになった。「どうやって並べるといいかな」「ぼく力持ちだから運ぶね」「どんなふうにしたらいいかな」と、声をかけ合いながら用具を並べ始めた。「先生、コロナだから、間空けよう」「フープあるよ」「先生、フープまだ廊下にあるから持ってくるね」など、アイデアを出し合う姿が見られた。間隔を空けてフープを置き、一人一人が順番を守り遊ぶ姿も見られた。

しかし、次第に、間隔を空けずに平均台を次々に渡ったり、途中でわざと落ちたり、落ちそうになると前の友達の洋服を掴んだりとふざける様子が見られた。そこで、教師は一旦遊びを止め、「今、危なくなかったかな。怪我はなかったけど、落ちそうになってたね」と、子供たちに平均台の渡り方や遊び方について問いかけてみた。すると、「洋服、引っ張ったらだめかも」「ふざけてる子もいたね」「一人一人、歩いた方がいいかも」といろいろな意見が聞かれた。その後は、間隔を空けられない友達には、「まだだよ」「順番だよ」と子供たち同士で声をかけ合いながら、遊びを続けることができた。

サーキット遊びの前半では、子供たちが自ら遊具を準備し、組合せ方を工夫しながらコースを設置することで、教師や友達と一緒に、体を十分に動かして楽しく遊ぶ姿が見られた。また、ルールをつくり、それを守って安全に遊ぶことを子供たちなりに考えていた。しかし、遊びに夢中になると周りの様子が見えなくなり、多少危険があっても強引に進んだり、調子に乗ってふざけたりしてしまう様子が見られた。

そこで、教師が「自分たちが安全に遊ぶにはどうしたらよいか」ということに子供たち自身が気付くような言葉掛けをした。そうすることで、子供たちが何をしてはいけないか、なぜ、してはいけないかを考える機会になった。子供たちが危ない行動に気づき、安全に遊ぶことができるような約束やルールを自ら考えることができたと思われる。

教師は、子供たちが安全により楽しく遊ぶことができるように、子供の活動をよく観察して状況を把握し、発達の段階に合わせて声掛けをしたり、考える場を設けたりすることが大切だと考える。

#### (事例4) 5歳児「歯のクイズを出そうよ」

— 歯の指導をきっかけに、自分の体や健康への興味・関心を高めていった事例 —

「いい歯の日」(11月8日)の翌日に養護担当者と協力し、6歳臼歯の大切さや歯の磨き方の指導を行った。A児は、奥歯をきれいにする「えっへんみがき」を初めて知り、その場で磨き方の真似をしていた。また、昼食後の歯磨きでは、教えてもらった「えっへんみがき」にチャレンジしていた。教師が「Aちゃん、さっき教えてもらった『えっへんみがき』で上手に磨いているね」と声をかけると、にっこり笑った。そして、鏡を見ながら一本一本の歯がきれいになっているかを確認して磨き続けた。

数日後、生活発表会に向けて、どんな出し物をするか話し合っていた。医者役のA児は「お医者さんだから、体や健康のクイズを出したい」と提案し、他の子供たちも賛成した。A児が「歯のクイズを出そうよ」と言うと、B児は「前に、養護の先生に教えてもらったよね」と言い、二人で養護担当者に聞いた話を思い出しながら「11月8日は何の日でしょうか」というクイズを考えた。

C児とD児は、二人で相談していたものの、なかなかクイズを決めることができなかった。教師が保育室の本棚に置いてある「体についての図鑑」を持ってきて「こんな本もあるよ」と知らせると、二人は図鑑の歯のページを見ながら、自分が知っていることや聞いたことを話していた。教師が「どんなクイズを出したいのかな」と聞くと、C児は「お医者さんだから、みんなに体のことを教えてあげたい」と答えた。そして、C児とD児は、「歯を磨くときは、ごしごし力いっぱい磨く、○か×か」というクイズを考え、出題することにした。

乳歯が抜けたり6歳臼歯が生え始めたりしているこの時期に、養護担当者がパワーポイントや歯の模型を使いながら歯の役割や磨き方の話をしたことで、子供たちは歯をしっかりと磨いて大切にしようという気持ちになった。教師が、養護担当者から指導された歯の磨き方を意識しているA児を認めたことで、さらにその気持ちを高めた。自分の健康に関心をもつことができるように養護担当者と連携を図りながら働きかけたことが効果的であったと考える。

また、生活発表会は子供たちの思いや興味・関心を大切にしながら準備を進めていたので、劇の中で歯に関するクイズを出すことになった。その際、体についての図鑑を保育室に用意しておき、クイズについて悩んでいる子供がいたときにタイミングよく提示したことで、歯の指導を生かしたクイズにしたいという子供の願いをかなえることができた。歯磨き指導から生活発表会に活動がつながり、子供たちの体や健康への興味・関心が高まっていった。

## 令和2年度幼稚園教育調査研究委員・担当（主任）指導主事等名簿

氏 名	職 名	所 属
鶴見 真理子	教 諭	富山大学人間発達科学部附属幼稚園
小谷 真由美	副 園 長	富山市・大沢野幼稚園
柳田 奈津子	副 園 長	富山市・大久保幼稚園
水戸田 美幸	主 任 教 諭	射水市・七美幼稚園
横山 朋子	主 幹 教 諭	富山市・堀川幼稚園
藤岡 美樹	教 諭	富山市・リンデ幼稚園
木村 真理子	保 育 教 諭	富山市・認定こども園文化幼稚園
廣瀬 美輪	保 育 教 諭	射水市・認定こども園太閤山あおい園
小竹 麻衣子	教 諭	高岡市・ひかり幼稚園
松岡 讓	保 育 教 諭	滑川市・早月加積認定こども園
田近 雅美	指 導 主 事	東部教育事務所
高橋 真理子	指 導 主 事	東部教育事務所
高信 智加子	主任指導主事	西部教育事務所
南 明子	指 導 主 事	西部教育事務所
東 早苗	研 究 主 事	富山県総合教育センター
吉田 真寿美	指 導 主 事	小中学校課

令和3年度

### 幼 稚 園 教 育 研 究

編 集 幼稚園教育調査研究委員会  
 発 行 富山県教育委員会  
 富山県富山市新総曲輪1-7

表紙絵 ひかり幼稚園(高岡市)

中扉絵 富山大学人間発達科学部附属幼稚園(富山市)

提供

※この「幼稚園教育研究」は、富山県総合教育センターのホームページからダウンロードできます。

URL <http://center.tym.ed.jp>